



とばを、一しよに云うようにしてみました。雨のことも、お日様のこどものせりふは同じですし、くり返し形になっているので、こどもたちもすぐ覚ええましたし、自分たちが、お話の中の登場人物になれることを、よろこんでいたようです。

私としては、この話から劇あそびへ発展させるつもりではなかったのですが、この話をしたあと、自由遊びの時に、お花ごっこと称して、おへやのすみに花の家をつくり、そこへ雨のこどもがやって来たり、お日様のこどもがやって来たりして、遊んでいるグループがあらわれました。この遊びの様子をみて、すでに劇あそびにはなっているけれどもこれをもう少し指導し、組のこどもが皆一しよに遊べるような劇にしたいと思い、こどもたちと一しよに考えながら、「花のこども」という劇あそびをつくり上げたわけです。

実際にやりながら、いろいろな工夫いたしましたが、

○この劇は、人に見せるための劇としてやったのではないので、どこから見ても同じ体形にしてやりました。

○花のこどもの家は、椅子をまるく並べまし

た。そして、椅子に頭をもたせて、花のこどもがねています。この時、椅子と椅子の間は、こどもが一人、楽に通れる位の間隔をあけておかないと、あとで雨のこどもやお日様のこどもが入って来る時に困りました。そして、出来るだけ大きい円にします。

○せりふは、その役のこどもが、皆一しよに言うことにしました。みんな一しよですと、声は出し易いのですが、出だしがなかなか揃いません。それで、トン、トン、トン、というときに、ピアノでかるく和音を叩き、それに合わせて言い出すことにしました。

○雨のこどもやお日様のこどもが、花のこどもをおこしに来る時は、一度目は静かに歩き、二度目はスキップ、三度目は二人一しよに（雨とお日様と一しよに）スキップ、というように、だんだんに強く表現するように、変化させてみました。

○二場では、雨のこどもとお日様のこどもも登場して、拍手して、よろこびを表しました。

なお、私は、花のこどもは、たねと考えていましたが、お話では、「外は寒い冬でした。花のこどもは土の中で眠っていました。…」

というだけで、はっきり、たねと言いませんでしたところ、この話をしたあとで、「花のこどもって、何でしょう？」とたずねますととっさに出た返答は、「つぼみ」でした。こどもには、たねよりもつぼみの方が、花のこどもとしては、直接的で、適当であるかと思いました。

（お茶の水大附属幼稚園）

新

刊

日本女子大学教授 愛育研究所食養部長  
医学博士 武藤 静子 著

栄養学の基礎から給食まで

A5判・208頁  
定価 250円 丁24

株式会社 フレーベル館